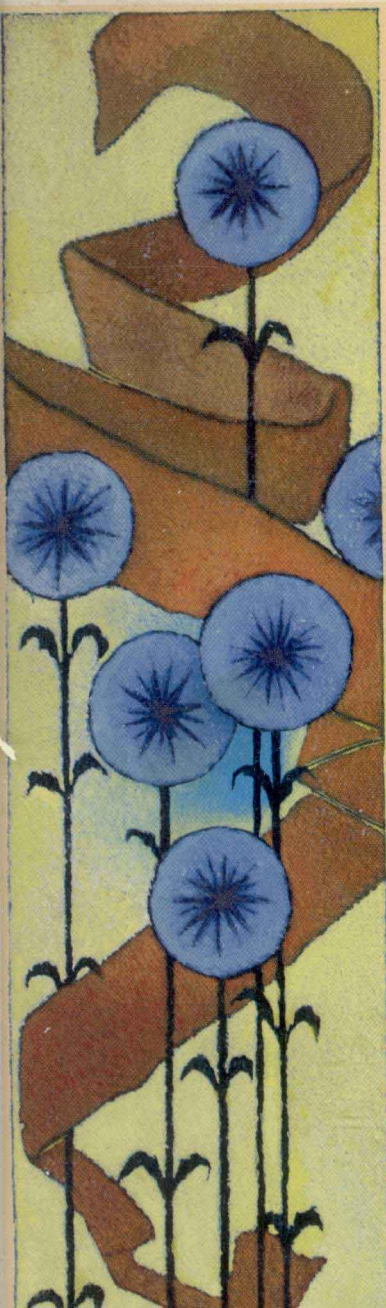


天の花と実

藤原審爾



天の花と実

藤原審爾

新潮社版



天の花と実



著 者 藤原審爾

昭和五十二年八月十日印刷

昭和五十二年八月十五日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 東洋印刷株式会社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一 編集〇三(266)五四

定価 九五〇円 振替東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

天
の
花
と
実

装
幀
加
藤
修

まだ八時になったばかりだが、山にかこまれたこの炎と土の里は夜がはやい。

街道ぞいの家々は、もう表戸を閉め、寝しずまったように閑かで、ラジオの音も聞こえない。時折り、暗い中空を、夜風がうなりをあげて渡って行く。そのたび夜が深くなり、夜気は凍てつくようにきびしく冷えこんでくる。

その暗く寒い夜道で、みよと茂夫しげおの前を歩いて行く、大きな進駐軍の防寒コートをきた寛伯父かんおじが、行李こしりを右手から左手に持ちかえながら、いまいましそうに言った。

「ちぎしょう、雪じゃ」

並んでせかせかと歩いている、隣家のお富婆とみさんが、ゆっくり夜空をあおいだ。

「バスおくれるやろか。陶仙園ちうせんえんの大奥だうおくさんに九時までに見よちゃんを連れていくと言うといたんや」

粉雪が暗い空で舞いはじめている。

寛伯父はそれへ答えず、急に道をいそぎはじめた。暗い街道のずっとむこうに、あかるい街灯のともったところがあつて、闇からうかがひあがつている。二、三人の小さい人影が手分けして焚き火をしはじめたのが見える。いきおいよく煙と一緒に燃えあがつた火が、寛伯父の心を簡単に

うばったのだった。

その街灯が四つ角に二つともっている処が、神社前のバス停である。小学六年生の茂夫は、ここからバスに乗り、大津の寛伯父の家へひきとられて行くことになっている。そして高校一年生のみよは、茂夫を送ったあと、お富婆さんに連れられて、奉公先の陶仙園へ出かけ、今夜から住み込まなければならぬ。

四つ角の石塀にかこまれた神社の前に近づく、入口の石畳の上の焚き火のまわりに、六、七人の町の者や正月休みで帰ってきた母子などが集まり、寒そうにバスを待っている。せまい町だから、みな顔見知りである。みよと茂夫を窯の職人だった亭主が亡くなったあと、女手ひとつで育ててきたお清が、二カ月ほどまえ死んだことも、みんなよく知っている。行商をやっている年配の達やんが、寛蔵と学帽をかぶった茂夫を見ると、

「茂、おっちゃんどこに行くんか」

と言いかけた。不憫な姉弟を達やんは思わずなぐさめかけたのだが、そのとたん茂夫がすつとみよのうしろにかくれ、みよがその茂夫をかばうようにしたばかりか、焚き火をかこんだ人たちがはつとしたようにしいんとなった。それで、達やんは、そんな慰めがどんなにおさない魂を傷つけるかを気づき、あわてて話をかえた。

「東の峠まで雪がきとるんや。今夜、寒いぞ。こっちへきて火におあたり。風邪ひかんようにな」

その達やんをたすけるように、火にあたっている焼き物店の主人が、寛蔵へすぐ話しかけた。「バスは十分おくれで、水口を出とるんやが、この雪やと、どないなことになるかわからへんな」

寛藏の斜めうしろで、みよは茂夫を火にあたらせようとしたが、茂夫はいいやをしてしりごみをする。

「そうや、お宮さんに詣ろか」

みよは思いつきに満足して元氣な声になった。ともかく火の映えをあかあかと顔にうけながら談笑している大人たちは、茂夫をおびやかしている世の中とおなじものである。そこから離れた茂夫が、すぐうんとうなずいた。それで話がきまった。

「富婆ちゃん、ちょっとお詣りしてくる」

みよはそうことわって、茂夫の手をとり、石畳の参道を神殿のほうへ駆けだしていった。

粉雪がわずかに舞っている夜の中に、そのおさない足音が、なにかあわれにひろがって行く。たちまち松の大樹が高く生い茂った境内の奥の暗がりの中へ、古びたオーバアをきて手をしっかり握り合った、おさない二人の姿がのまれるように消えると、しいんとなつてその足音に耳をかたむけていた人々の一人が、ぼそりとよわわしい声でつぶやくように言った。

「どないにかならんもんかのう」

それへ誰も答えず、火のまわりの沈黙は一層深く重たくなった。

間をおいてはるかな神殿のほうから、鈴を鳴らす音が聞こえてきた。鈴の音は、一度絶え、もう一度鳴った。

凍てつくような夜の中へ流れる鈴の音色は、かたく小さかった。

淡い電灯がともった神殿の正面の、まだお飾りがついている大きなお賽銭箱さいせんの前で、おさない姉弟たちは、身を寄せ合うようにならび、こごえた小さい掌てを合わせ、しっかりと目をとじ、頭くちを

たれ、凝つと身じろぎもせず、ひたすら祈りつづけていた。

そのおさない心と魂の上で、なんどか強い夜風が樹々の梢をざわめかしながら吹きぬけて行き、そのたび寒風はいきおいをまし、やがて粉雪が降りしきりはじめた。

漸く永い祈りを終えて、二人は言い合わせたように頭をあげた。

永い祈りが心を洗い、新たな勇気を授けたように、みよはいきいきとなり、丸まっちい顔の大きな目とあかい頬を灯に輝かせながら、あかるく話しかけた。

「お盆のとき、茂夫と会って遊べますようにと、祈ったさかい、お盆の時は一緒に母ちゃんのお墓にまいる。茂夫が病氣せんようにたのんだよって、きつと会える。姉ちゃんも手紙かくけどな、茂夫も土曜の晩には、手紙かくのやで、ええな」

「――」

「日曜は遊んでくたびれて、手紙かかと寝てまうよって、土曜に書くんや。茂夫は、なにをおねがいたんや」

「ぼくな」

茂夫の声は細くいまにも泣きだしそうだった。

「ぼくな」

茂夫の声は鳴咽をこらえてひきつった。

「母ちゃんどこへ行かしてほしいいうて、たのんだんや」

「なに言うとなんやっ」

みよがおこって茂夫の肩をつかみ、ぐいと自分のほうにむけた。

茂夫は鳴咽をこらえて歯をくいしばっている。唇がうごめきわななっている。

閉じた目から二筋太い涙の流れが頬をつたっている。それがぎよらかに灯に輝いている。

みよは叱りつけるどころか、たちまちどっと涙を大きな目からほとばしるようにあふらせた。それでもみよは、まるで母親のように、いそいで茂夫の涙を拭いてやりながら、うわずった声で必死にいさめだした。

「なにいうとんや、姉ちゃんがついとるやないか。なあ、いまに一緒に暮らせるように、姉ちゃんがするよって、阿呆なこと考えたらあかんで。おまえは、一生懸命、勉強だけしとりやええんや。寛伯父さんが言うたやろ。家売った金で、大学まで行けるんや。立派な人になれるんや。どんなことがあっても、姉ちゃんがおまえを大学に行かせてやる。ええな、中学出るまでの辛抱や。高校生になるまでに、一緒に暮らせるようにするよってな。大津へ行つて、辛抱出来んときには、帰つてくりやええんや。どうしても母ちゃんとこへ行きたいのやつたら、そのときは、茂夫、姉ちゃんも一緒に死ぬる。それやつたらええやろ」

一緒に死ぬということとその深い愛で、はっと茂夫は蘇ったような目になった。

「姉ちゃん、ぼく、大津で一生懸命勉強する。姉ちゃんに心配かけへん」

「ありがと、茂夫」

みよはほっとするのと俱に、精根をつかい果たしたように、へたへたとその場へ坐りこんでしまった。それでもみよは、あどけない顔を仰向け、茂夫を凝っとみつめて、子煩悩な母親のようにまだしゃべりつづけた。

「大津へ行ったら、みんなに好かれる子にならんとあかんよ。家売った金をだしとるなんて思う

たら、あかんよ。あれは、学資やからね。店の手伝いもしてな、可愛がつてもらうんや。母ちゃん死ぬるとき言うたる、しっぽをふる犬は叩かれへん言うたる。なんでもかんでも、感謝して、しっぽをふるんや。忘れんとき、ええな」

むこうの街道のほうから、バスのクラクションが聞こえ、寛伯父の、茂、みよつとよぶ声が聞こえた。いらだっているその声で、みよがぴよんとはね仕掛けのような感じで立ちあがった。粉雪はその間にさんさんと降る雪に変わっていた。

おさない姉弟たちは、一つの苦難を乗り越え、あらたな勇気をさすけられたように、活発になり、その降りしきる雪の中へ、手を取りあい、仲よく元氣よくおどりあがるようにして飛びだしていった。

陶仙園は山の麓を少しのぼったところにある。

屋根に白く雪をのせたバスが出ていったあと、お富婆さんが借りてきた傘をさし、みよとお富婆さんの二つの傘は、降りしきる雪の中を、陶仙園のほうへ歩きだした。茂夫はバスの中からにっこり笑って手をふったが、それは精一杯の茂夫のがんばりなのである。大津の寛伯父の家は伯母が小さい雑貨屋をやっており、みよくらの二人の子どもがいる。寛伯父は戦後しばらく闇屋をやっていたりして、家に落ち着いていられぬたちだから、茂夫をかばってくれるような者はいない。そんな中で茂夫がうまくやって行かれるかどうか。いざ別れてみると、また一ト味ちがった不安がわきあがってくる。みよの足どりはだんだん重くなり、傘が前に深くたれさがってきた。

そんな不安にふるえているみよの様子に、お富婆さんは不憫をかきたてられ、そのうち自分の傘をたたんで、

「寒いなあ」

と鼻をすすりながら、ひょいと、首をちぢめてみよの傘の中へ入ってきて、右手でみよから傘をとった。

「こっちへ寄れや」

綿入れ半纏はんてんの袖を、みよの首にまくようにして、お富婆さんはみよの肩を抱きよせた。抱き寄せてみると、みよの軀からだはまだおさなく小さかった。とてもこの世の重い荷をたえられるとは思われない。お富婆さんは、息を大きく吸いこみ、しょぼしょぼまばたきした。みよの父親が亡くなったのは、みよが小学五年生のときで、母親が働きに出なければならなくなり、みよはそのときから、御飯の支度や弟の面倒をみなければならなかった。一所懸命そんな生活を五年もつづけて、その揚句、姉弟ちりぢりになり、住込み奉公に行かなければならない。世の中には数えきれないほどたくさんのお富婆さんがいるのに、なぜこんな心根のよい子に、背負いきれないほどの重荷がふりかかってくるのだろうか。あまりにひどすぎ、神も仏もいなければ、愛も正義もなさすぎるようではないか。お富婆さんは細くなっていた息を、ふうつと大きくして、

こんな世の中に長生きしとうないの

と思った。長生きしとうない、いやな世の中をこれから何十年も生きて苦勞しなければならぬみよが、それでひとしおまた不憫になった。

お富婆さんは、口になせば責任を持たなければならないことを、百も承知しているし、滅多に

言質^{げんち}になるようなことを言わぬほうなのだが、老いた胸をゆさぶる思いを口にしないではいられなかった。

「なあ、みよ、奉公先は陶仙園だけやないんやで。無理に辛抱せんでもええんや。こりゃ辛抱出来へんと思うたら、うちへ戻ってくるんや。ほかのどこ、すぐ探してやるよってな」

お富婆さんにしっかり抱かれてみよはもういつものみよにもどりでいた。

「婆ちゃん、うち、つとまらへんか」

「みよに出来んことないよって、そんなことあらへん。陶仙園の大奥さんは、よう出来たおかたやけどな、若奥さんは東京の金持ちの家の子やし、末のお嬢ちゃんも、陶仙園がらくになつてからの子や。目下の者のことなんか、眼中にないさかいな、無理を平気で通す。人づかい荒いよって、苦勞がたえへんかもしれんな。奉公人も六人おるんや。意地悪されることもあるやろしな」
「よその家へ奉公するのやさかい、うちとは違うのあたりまえや。覚悟してる。婆ちゃん、心配せんでええよ」

「おおそうかそうか」

「こっちへ半年、あっちへ半年、寛伯父さんみたいにふらふらしてると、ふらふら癖がつくんやで。じつとひととで辛抱出来へんようなら、どこいってもつとまらんやろ。うちはがんばるつもりや。うちがちゃんとならんと、茂夫をひきとられへんよってな」

「みよはほんまにええ子やなあ、辛抱するんやで。金は辛抱の木になるんやでなあ」

雪の降りしきる町通りには、もう起きている家もない。森閑とした雪の中を、みよとお富婆さんは町通りから右に曲がり、せまいうねった坂道を陶仙園のほうへ、一つ傘の下でよりそいなが

ら、ひたひたとのぼっていった。冬の夜は雪に見舞われ、どんどん更けて行っている。しかしやがて陶仙園の大きな家がみえるところまでのぼると、陶仙園には明るい灯があちこちの窓にともっていた。

みよは、そこだけ灯が輝く陶仙園を仰いで、小さなおどろきの声をあげた。

「まだみんな起きてるなあ」

お富婆さんはちよっとにくしげに答えた。

「金持ちほど夜はおそいんや。銭勘定せにやらんよってな」

そんなものか、どこが銭勘定をしているのだろうか、みよは坂下の町の家々のほうをふりむいた。銭勘定をしたりするほどの金持ちはいないのだろうか、炎と土の信樂しがらぎの小さい里は、降りしきる雪の中で、ひっそりともう寝しずまっており、みよの目に映った灯は淡くよわよわしい街灯だけだった。多分、雪の夜更けの町のすがたを見るのはじめてだからだろう、東の間みよは、その町のすがたがなじめなくて、なんだか町と別れてしまったような、もう二度と町へ帰ることが出来なくなったような気がした。

みよとお富婆さんは、明るい灯のともった母屋をぐるりとまわり、裏手の台所のほうへやってきた。台所の中からは、かたこと庖丁はうちょうできゅうりをきざむような音がしていた。

腰高障子の入口の戸のところで、

「みよ、明るくはきはき返事せなあかで、にこにこしてな」

お富婆さんは早口にそう言つて、腰高障子をあげ、声をかけながら台所の土間に入つていった。広い台所には、突き当たりに板の間があり、その奥に畳敷きの部屋がみえた。かたことぎむ音が聞こえたところは、つい右手の流しで、綿入れ半纏をきた三十すぐらいのお婆さんが、寒いたたきで冷えこみをこらえかね、足ぶみしながら、酢のものを小鉢へ盛りつけていた。そのお婆さんが四角ばった顔をみよのほうにむけ、じろっとみよをみた。

「すぐ大奥さんに知らせてくる。ここで火にあたつとりんさい」

そう言つて、小鉢を盆にのせ、そのお婆さんは、大きな火鉢のあるところから、板の間へあがり、その先の畳敷きの部屋をつきつて奥へ入つていった。

「あれが女中頭のおたきさんじゃ。さっぱりした女子はんや」

板の間の上がりがまち框の大きな火鉢のところへ、お富婆さんは腰かけ、あたりを見ながら、

「ここで男衆が御飯をたべるんや。そっちの畳の間は、旦那さんがたの御飯をたべるところや」

と説明してくれだした。毎朝二十人ほどの連中が、御飯をたべるので、おたきさんたちは戦争のようにいそがしいなどと言っているうち、奥から、

「ご苦労さん、ご苦労さん」

と、なんどか町でみかけたことのある大奥さんが、藤色か灰色かわからぬ色あいの羽織と着物で、せわしなく出てきた。お富婆さんが、はじめたようにぱっと立ちあがり、

「遅うなりました、この子がみよでござります」

と、ばかていねいな言葉つきになった。

「寒かったやろ。雪が積もったらあぶないから、お富さん、はよう帰ったほうが、よろしがな。」

もう遅いから、万事、明日のことにしましょ」

「そんなら、明日よせてもらいます」

「そうしょ」

とせわしく言っている大奥さんの前の土間で、みよはいそいでオーバをぬいだ。雪で湿^し気^けったオーバをぬいだみよは、高校のセーラー服姿になった。

それをみるなり大奥さんは、あっとおどろいたような感じになった。

セーラー服になるとみよは、ずっと小柄になり、少女っぽくみえる。いたいけないおさなさが、その小さい全身にあふれている。

こんなおさない子をつかうのは罪悪なのだが、やとつてやらずに転落させたり路頭にまよわせるのは、もっと大きな罪悪である。それになにより不運にいためつけられたいたいたしさに、大奥さんは心をゆさぶられたのだった。

急に大奥さんは、顔も目も声もやさしくなった。

「みよちゃん、さあ、おあがり」

「はい」

「そんなら大奥さん、これで。みよ、明日くるさかい、はよう寝させてもらい」

お富婆さんは、ぺこぺこなんどもお辞儀をしながら、傘二本もって、雪の降りしきる夜の表へ出ていった。

「まあ、こっちへおいで」

大奥さんは独りになって心細さでこわばったようになったみよを、先に立って奥の部屋へ連れ

ていった。

その部屋は八畳ほどの広さで、掘炬燵^{ほりごたう}があり、そこに綺麗な三十まえの若奥さんと赤い部厚いガウンをきたお嬢さんとが入っていた。炬燵の上には蜜柑^{みかん}が大皿のように盛られて、灯に輝いている。

陶仙園の人たちは、贅沢^{ぜいたく}で派手なので、町でも目立つし、始終話題をまいており、みよのほうは若奥さんの顔もお嬢さんの圭子のこともよく知っている。

その二人のほかに、隣りの炉^ろのある板の間のその炉端^{ろばた}で、若主人の要^{かなめ}と弟の宗人^{そうじん}が、おたきの酌で酒をのんでいた。

酒と煙草の匂いがこもった部屋で、みよはみんなを大奥さんに紹介され、一人一人に挨拶してまわった。そのあと大奥さんは、みんなを見まわしながら言った。

「みよちゃんのお父さんは、窯^{かま}たく手伝いをしていたんやけど、兵隊にいったんやけど、シベリヤから戻って、二年ほどして死んだのや。お母さんと弟の三人で暮らしたんやけど、お清さんは去年の十一月に、裏山で崖から落ちて死んでしもうた。可哀相な境遇の子なんやさかいなあ、みんな、可愛がつてやってな」

若奥さんの典子が、すぐに弟さんはどうしてるのと聞いた。さっき大津の伯父へひきとられていったと答えると、

「大津なら、車で二十分ね。いつでも会えるわね」
となくさめるように言った。

するとそのむかひにいた圭子が、